

発信力に力点を置いた英語教育の実践
～英語の知識を戦略的なコミュニケーションスキルにどう結び付けるのか～

研究期間 平成 28 年度

研究代表者名 山崎 祐一

これまでの我が国の大学における英語教育は紆余曲折を経てきた。伝統的な文法・トランスレーション・メソッドからの脱却とともにコミュニケーションを重視した、いわゆる実践的な英語運用能力を獲得できる語学教育が強調されるようになってきている。高校では 1994 年度より「オーラルコミュニケーション」、小学校でも 2011 年度より「外国語活動」が必修として導入され、2020 年度より 5、6 年生に対しては教科化されることになっている。文部科学省も「英語が使える日本人の育成」や「グローバル人材の育成」などを掲げ、実践的に活躍できる日本人の育成を目指そうとしている。

しかし、これまで、それらがどのような形でコミュニケーションスキルに結びついてきたかは疑問の残るところが多い。これまでの日本人大学生に対して実施したアンケートから判断しても、日常的なコミュニケーションにおいてでさえも、特に英語で発信していくことに関しては、苦手意識を拭えていないことが多いというのが現実のようだ。英語による発信を身につけていくには、言語的要素のみの教育に固執せず、広い国際的視野を持ち、異なる文化や習慣を持った人々と偏見を持たずに自然に交流し、異文化と共生していく資質や力量を養成することも重要な課題のひとつと考えている。目標文化圏の人々の考え方や習慣について正しく深く理解することにより、自文化中心主義や異文化に対する偏見的態度をなくし、英語による対等なコミュニケーションができる人材が育成される。英語教育の目的がいったい何なのかを考えたとき、それが、異文化の人々とのコミュニケーション能力を高めること、異文化の人々の思考方法や行動様式を知り、ひいてはそれを「国際理解」や「国際平和」につないでいくことであるのならば、コミュニケーションの言語的要素のみならず、社会文化的要素にも目を向けていくことが必要である。そして、それが真の地球規模のコミュニケーション能力に結びついていく。

本研究では、科研費（基盤研究 C [平成 26 年度～29 年度]）に係る研究課題にも関連し、「学外」及び「海外」で発信力を異文化共生や国際交流とリンクさせた形で、「英語を使って何ができるのか」を学習者が「体験」を通して実感し、学習意欲のさらなる向上につなぐ取組について、全国規模学会の国際学術大会において報告した。それぞれの活動サイトで得られた知見を学習の場にフィードバックし、さらに学び、それをまた現場に還元し、これを円循環的に展開する形で英語での発信力を身につけようとする大学生の活動を、ハワイ大学におけるプレゼンテーションで紹介した。いずれの成果発表においても、地域とリンクした英語教育、及び異文化間コミュニケーション研究のテーマと実践方法に

関して、オーディエンスから高い評価を得ることができた。特に、アメリカ文化が混在する佐世保市として、地域の実態応じた取組は、大学生のみならず、佐世保市、あるいは市民一人ひとりに有益であり、現在、佐世保市長や同市教育委員会が中心となり取り組もうとしている市の英語プロジェクトにも直結する。本研究における実践は、英語学習を地域の異文化共生にどのように役立てることができるかというサービスラーニングの一環としても捉えることができる。ボランティアやインターンシップとは異なり、サービスのプロバイダーとレシピアントの両方が学習し、お互いにとっての利点がある。そういう意味では、本取組は、外国語としての英語学習にとどまらず、地域の国際友好親善や国際交流・国際理解にも、何らかの形で寄与するものと考えている。大学は研究と高等教育の場でありながら、地域のために貢献していく責務も担っており、本学が地域に開かれた大学として、地域とリンクし、そこで得られた知見を、さらに海外に発信していくグローバルマインドを育成する教育につないでいくことが重要である。